

ベンガル語における目的格接辞-ke と目的語の定性・有生性

東頭 拓也

(言語文化学部 ベンガル語専攻)

キーワード: ベンガル語, 定性, 有生性, Silverstein の名詞句階層, DOM

0. はじめに

世界のさまざまな言語において定性または有生性、あるいはその両方が名詞の格付与に影響を与えることが Aissen(2003)などで述べられている。ベンガル語の-ke は、目的語の有生性よりも定性に強く依存し、[定+]のときに出現する傾向が強いという (Bhottacarjo 1984、詳しくは後述)。本稿は、名詞の目的格を表す接尾辞-ke が出現する条件について、その名詞の定性と有生性に注目しながら考察してゆく。その上で、有生性と定性のどちらがより強く-ke の出現に関わっているかを明らかにすることが本稿の主たる目的である。なお、例文番号、和訳、グロス、太字、囲み線はとくに断りのない限り筆者による。

1. 先行研究

ベンガル語では定性が重要な概念であるため、本稿では、1.1節で定性に関する文法事項をまとめ、続く 1.2節にて本稿で扱う目的格接尾辞-ke に関する先行研究をまとめる。また 1.3節では、Silverstein (1976)の名詞句階層が本稿の内容にどのように関係するかを、角田 (1991)の記述から述べる。

1.1. 奈良(1992)

奈良(1992: 970)によると、「-ta/-ti は名詞や後置詞に接尾し、その語が表すものを特定するだけでなく、そのものに対する話者の心情をも表す。例えば chele (男子) に対し、chele-ta は特定の男子であり、chele-ti はその特定の男子に対し好感を抱いている際に用いる形である」(奈良 1992: 970 を要約)。本稿ではこれら-ta/-ti を定辞と呼称し、これの付与された名詞は[定+]であるとする。

1.2. Bhottacarjo(1984)

1.2節では、ベンガル語で書かれた文法書である Bhottacarjo(1984)における目的格¹接辞-ke についての記述を要約し概観する。「目的語を表す-ke を付与するかという問題には、三つの原則がある。第一に、無生物(oprani)には置かれない。第二に、人物(lok)以外には通常付与されない。第三に、定(nirdisho)の物には人間でなくても付与されるが、不定ならば付与

¹ 本稿では、統語上の間接目的語/与格と直接目的語/対格を厳密に区別せず、目的語/目的格として扱う。なお、形態論レベルではベンガル語において与格と対格の区別はない (奈良 1992)。

できない。また (-ke は)、不定の人物には付かないが、定の人物には付く。さらに目的語を二つとる文では、直接目的語(prodhan korm)に-ke を付与することはできない」(Bhottacarjo 1984: 39-41 を要約)。Bhottacarjo(1984)のあげる「三つの原則」によると、目的語は人物であるか、定性が高ければ-ke が使用されるといえる。

1. 3. 角田 (1991)

Silverstein (1976)における名詞句の有生性階層は、元々はオーストラリア原住民の言語における対格型・能格型といった格組織について述べたものである。しかし他の研究者によって、「この階層は豪州原住民語以外の多くに反映していること、また、格組織以外の、文法の様々な減少に反映していることが明らかにされた」(角田 1991: 45)。角田(1991)は、日本語の研究でこの名詞句階層を利用しており、概ね階層の左側が主語、右側が目的語となる傾向が日本語の文では強いとしている。

一人称 二人称 三人称 親族 人間 動物 無生物
固有

図 1: Silverstein (1976)における名詞句階層 (角田 1991:42 より引用、一部改めた)

1. 4. 先行研究のまとめと問題点

Bhottacarjo(1984)における第二の原則である「(-ke は) 人物以外には通常付与されない」と、第三の原則である「定のものには人物でなくても付与される」はかなり矛盾するものであり、より正確な分析の必要があるといえる。Bhottacarjo(1984)の示す-ke についての「三つの原則」および「不定の人物に付与されない」「目的語を二つ取る文で、直接目的語に付与できない」といった規則が、実際の言語使用状況を反映したものかを本稿で明らかにしたい。本稿では、1.4. 説で述べた Silverstein (1976)の名詞句階層が、ベンガル語の-ke の接尾規則を考察するために有用であると考えた。「ベンガル語でも階層の左側ほど主語になりやすいのであれば、名詞が目的語であった場合に主語でないことを明確化するために、左側の名詞ほど-ke を付与する傾向が強くなるのではないか」という仮説を立て、2.節以降の調査を行った。

2. 第一回調査

-ke の実際の使用状況を確認するため、バングラデシュの大手日刊紙 Prothom Alo がインターネット上で公開しているニュース記事を対象として調査を行った。文中の目的語、ならびにそれが目的格 (-ke) をとるかどうかを、その名詞の有生性 (無生物・動物・人物)・定性 (定・不定) とあわせて手作業で抽出した。なお、ニュース執筆者の癖による偏向を回避するため、5 人の執筆者により書かれた記事を 1 件ずつ調査対象とした。

目的語の定性は、1.2. で述べたように定辞が付与された場合は[定+]とする。またすでに文章中で取り上げられている、あるいは文脈等で話者同士に共通の認識があると判断される場合も[定+]として扱う。

2.1. 調査結果

第一回調査では、合計5件の記事(全959語)の中から目的語を12例得ることができた。結果、[定+, 人物]は2例中2つとも-keが付与されており、その他10例([定-, 人物]1例、[定+, 無生物]3例、[定-, 無生物]6例)ではいずれも-keの付与は見られなかった。全体として用例は多く集まらなかったものの、定の人物には-keが義務的に使用されていた。また不定の人物に-keが付加されなかった点はBhottacarjo(1984)の記述に一致している。しかし定の無生物にひとつも-keが使用されていなかった点は、1.2. であげたBhottacarjo(1984)の「第三の原則」と異なっている。

2.2. 第一回調査の課題

第一回調査の大きな問題として挙げられるのは標本数の少なさと、[動物]の目的語がひとつも見つからなかった点である。前者については調査の継続によってある程度解消できると思われるが、後者はニュースという性質上登場する可能性が低い。そのため、動物を目的語とした文を-keの有無をペアとして作り、インフォーマントに可否を問う調査を行う必要があると考えられる。また、今回の調査では語順が格付与に与える影響を考察しなかった²ため、インフォーマントへの聞き取り時に語順を適宜入れ替えたペアを作ることが適当であると考えた。

3. 第二回調査

第一回調査で得られなかった[動物]目的語や、倒置による格付与の影響を調査するため、第二回調査ではベンガル語母語話者インフォーマント2名(男性・西ベンガル州・1990年生まれおよび男性・ダッカ・生年不詳、壮年)に対しての聞き取りを実施した。便宜上それぞれX氏とY氏とする。

聞き取り調査は、群ごとに「」で囲まれた意味を想定したベンガル語の短い文をインフォーマントに提示し、それぞれ「A:自然な表現」「B:許容可能だが不自然」「C:許容不可能」として判断してもらう形式で行った。

3.1. 調査結果

第二回調査で得られた結果を表2に整理し、それぞれの例文におけるインフォーマント2

² ベンガル語は基本的にはSOV語順であるが、語順はある程度入れ替えることが可能である(奈良1992)。また、義務的な主格標識も存在しない。そのため、一時的にOSV語順となった際目的語に-keを接尾しなければ、正確な意味の理解に支障をきたす場合があると予測された。

名の回答を、Aを2点、Bを1点、Cを0点と換算し、その点数の高い順に並べた。なおA/Bというように二つの文字が回答にある場合、その平均(この場合1.5)として計算する。また、(19)のようなOSV語順になっている文に対しては、表中では#(19)のように記す。なおA,B群は二重目的語の文であり、本稿では直接目的語についてのみ調査した。

表2: 第二回調査における目的語の定性・有生性と許容度の一覧(敬称略)

		2点	1.5点	1点	0.5点	0点
A群 [定+,	X	(1)-ti, (2)-ti-ke				(3)-∅
	Y	(1)-ti		(2)-ti-ke,		
B群 [定-,	X	(4)-∅		(6)-ke		(5)-ti-ke
	Y	(4)-∅, (6)-ke				(5)-ti-ke
C群 [定+,	X	(9)-ke		(7)-∅		(8)-ti-ke
	Y	(8)-ti-ke, (9)-ke				(7)-∅
D群 [定-,	X	(10)-∅	(12)-ke			(11)-ti-ke
	Y	(10)-∅				(11)-ti-ke, (12)-ke
E群 [定+,	X	(14)-[a-ke	#(16)-[a-ke			(13)-[a, #(15)-[a
	Y	(24)-[a-ke, #(16)-[a-ke				(13)-[a, #(15)-[a
F群 [定-,	X	(17)-∅	(18)-ke			#(19)-∅, #(20)-ke
	Y	(17)-∅, (18)-ke,				#(19)-∅
G群 [定+,	X	(23)-[a-ke		(22)-[a,		(21)-∅
	Y	(21)-∅, (22)-[a,				
H群 [定+,	X	(26)-[a		(27)-[a-ke		(25)-∅, (28)-ke
	Y	(25)-∅, (26)-[a		(27)-[a-ke		(28)-ke

3.2. 調査結果のまとめ

先行研究および第一回調査で不明瞭だった、有生性が動物である名詞の扱い、および語順の影響について新たな情報が得られた。

例文(13)(14)を見ると、[定+, 動物]である場合、目的語に-keを付与しない文は許容されないことが分かる。また(17)(18)からは、[定-]であっても-keを付与することは許容されることが分かった。さらに(19)(20)からは、目的語を主語に先行させる場合、目的語に-keを付与しなければ主語と解され、意図しない意味で解釈されるため、[定-]の目的語であっても-keを付与する必要があることが確認された。

一方、Bhottacarjo(1984)の記述からは予想できない用法がいくつか見つかった。(7)(8)を含むB群は[定+, 人物]の文であるにもかかわらず、定辞-tiと目的語接辞-keが両方用いられた(8)は、-∅である(7)より許容度が低くなっている。また[定+, 無生物]であるH群では、-keを付与した(28)は-∅である(25)より許容度が低くなっている。すなわち無生物に関して、定の目的語であるにもかかわらず、-keを接尾するとより不自然な文になることがある、とい

うことが新たに発見された。ここから「目的語に対する-ke の付与には、その定性よりも有生性がより強く関係する」といえる。なお例文(2)、(3)、(6)を見ると、Bhottacarjo(1984: 41)で述べられていた、「二重目的語をとる文では直接目的語に-ke を付与できない」という規則は、真ではないようである。紙幅の都合上、(2)のみ下に掲載する。

「私は彼女にその（定の）虎を見せた。」 X 氏 Y 氏
 (2) *ami ta-ke shei bagh-ti-ke dekha-lam* A B
 1.SG 3.SG-OBJ that tiger-DEF-OBJ show-1.PST

3.3. 第二回調査の課題

第一回・第二回調査では有生性を「人物」「動物」「無生物」と階層化したが、Silverstein (1976)などで述べられているように、より階層を細分化することが求められる。また第二回調査では「無生物」の例として「友情」と「契約」を使用した。前者は-ke を付けたほうが、後者は付けないほうがより自然な表現となるなど、いくらかの差異がみられた。階層の細分化に際し、この点も留意したい。加えて今回の調査で[定一，無生物]の目的語の例を想定しなかったことは大きな反省点である。

4. 第三回調査

第三回調査は第二回調査と同じ形式で、主に「有生性の細分化」「[定一，無生物]の目的語の調査」を目的に行った。有生性の細分化は、Silverstein(1976)の名詞句階層における「無生物名詞」をさらに細分化し日本語の無生物主語について研究した熊(2009)を参考に行ったほか、[人物]の目的語について、人名表記と代名詞表記で差異があるかを調査した。

無生物名詞の下位分類は、植物・生物の部分、自然物、生産物などを指す「具体名詞」、風、光、音などを指す「自然現象名詞」、精神、言語作品、性質、時間などを指す「抽象名詞」、国、政府などを指す「組織名詞」の四つとした。なお、X 氏から許容度のレーティングに加えて、「誤解を防ぐための-ke 付与」についても情報の提供を受けた(4.2.1.節で後述)。

4.1. 調査結果

第三回調査の結果を、第二回調査と同じように表に整理する（様式は 3.2.節における表 2 に倣う）。

表 3: 第三回調査における目的語の定性・有生性と許容度の一覧（敬称略）

		2 点	1.5 点	1 点	0.5 点	0 点
I: [定+, 人物 (人名)]	X		(30)-ke			(29)- \emptyset
	Y	(30)-ke				(29)- \emptyset
J: [定+, 人物 (代)]	X		(32)-ke			(31)- \emptyset

名詞)]	Y	(32)-ke				(31)- \emptyset
K: [定+, 無生物 (具体名詞)]	X		(33)- \emptyset , (34)-ke			
	Y					(33)- \emptyset , (34)-ke
L: [定+, 無生物 (自然現象名詞)]	X	(35)-[ta		(36)-[ta-ke		
	Y	(35)-[ta				(36)-[ta-ke
M: [定+, 無生物 (抽象名詞)]	X	(37)- \emptyset				(38)-ke
	Y	(37)- \emptyset				(38)-ke
N: [定+, 無生物 (組織名詞)]	X	(40)-ke				(39)- \emptyset
	Y	(40)-ke				(39)- \emptyset
O: [定-, 無生物 (具体名詞)]	X	(41)- \emptyset				(42)-ke
	Y	(41)- \emptyset				(42)-ke
P: [定-, 無生物 (自然現象名詞)]	X	(43)- \emptyset				(44)-ke
	Y	(43)- \emptyset				(44)-ke
Q: [定-, 無生物 (抽象名詞)]	X	(45)- \emptyset				(46)-ke
	Y	(45)- \emptyset				(46)-ke
R: [定-, 無生物 (組織名詞)]	X	(48)-ke				(47)- \emptyset
	Y	(48)-ke				(47)- \emptyset

4.2. 第三回調査のまとめ

(29)-(32)からは、目的語が[定+, 人物]である場合、それが代名詞であろうとなかろうと、義務的に-ke が付加されることが分かる。また、無生物名詞を「具体名詞」「自然現象名詞」「抽象名詞」「組織名詞」に分類した結果、具体名詞、自然現象名詞、抽象名詞は定性に関わらず-ke の接尾ができないこと、および組織名詞は定性に関わらず義務的に-ke が接尾されることが分かった。すなわち組織名詞は、無生物名詞の中でもきわめて有生性が高いものであると言える。

4.2.1. 誤解回避のための例外的な付与

4.2節では「抽象名詞には-ke を付与できない」と述べた。これは第二回調査の(23)(24)、とりわけ-[ta-ke が-[ta や- \emptyset と比べてもより自然であるとした(23)と矛盾するように見える。今回インフォーマント X 氏にこの理由を尋ねたところ、-ke がない場合「私たちの仲はこじれない (悪化しない)」という意味に思われるとの答えを得た。ベンガル語では、動詞の命令形活用語尾に-be/-ben がある³が、これは未来・意志を表す二人称・三人称活用語尾と同形である (-be は主語/命令対象に対しての敬意なし、-ben は同敬意あり)。また G 群で使った動詞 bhang-a⁴は、「壊す」意の他動詞としても「壊れる」意の自動詞としても使うことができる。そのため X 氏は、例えば(22)は下に示す(22')のように解釈されるとして「許容不可能」

³ 二人称侮蔑命令の-ish や三人称命令 (希求) の-k/-uk は本稿では割愛する。

⁴ ベンガル語の動詞の原形は「語幹-a」で表すことが一般的である。

としたと考えられる。

- (22') *amader bondhutto bhang-be na!*
 our friendship break-3.FUT NEG
 「私たちの友情は壊れない」

これに対して、友情(*bondhutto*)に-ke が付与された(23)では、これが目的語であることが明白となり、同時に *bhang-a* が他動詞であることが明らかとなる。そのため「私たちの友情を壊さないでくれ」という意味から誤解されることがなく、最も自然な表現と評価されたといえる。なお H 群は G 群とほぼ同じ構造であるが、どちらも-ke のみを付与した文である(24)(28)の許容度には大きな差が出ている。これも上記の「有生性と定性の観点からは-ke が付与できないが、誤解を防ぐために付与する」という説の補強となる。以下、(24)(28)の全文を掲載する。

- | | | | |
|------|--|-----|-----|
| | | X 氏 | Y 氏 |
| (24) | <i>amader <u>bondhutto-ke</u> bhang-be na!</i> | B | A |
| | our friendship- OBJ break-2.IMPL NEG | | |
| (28) | <i><u>cukti-ke</u> mon-e rakh-ben</i> | C | C |
| | contract- OBJ mind-LOC place-2.IMPL. <u>HON</u> | | |

(24)は比較的許容度が高いのに対し、(28)はインフォーマント両名とも許容不可能な文だとしている。「友情」「契約」は抽象名詞であるから、[定+]であっても本来はどちらも-ke を付与することができない。しかし先述のように、(24)は-ke を付与しなければ(22')のような意味にとられる可能性がある。その一方で(28)のように動詞語尾が-*ben* (敬意命令)となっている場合は無生物が主語になることが考えられず、また *mon-e rakh-a* (覚える:他動詞)が「契約」を主語とすることは考えにくいから、以下(26')のような解釈は不可能となる。そのため(26)は自然な表現となり、一方で(27)に必要な-ke を付与する文となる(28)は許容不可能なものとなるのだと考えられる。

- (26') **cukti-ta mon-e rakh-ben*
 contract-**DEF** mind-LOC place-3.FUT.HON
 「*契約がお覚えになるだろう」

5. まとめ

3.2. 節で述べたように、-ke の付与については、その名詞の有生性が定性よりも強い支配力を持つ。しかし 4.2.1.節で述べたように、この二つの要因より上に、目的語であるという

統語的役割の明確化、つまり「誤解回避」という第三のファクターが存在することが分かった。すなわち、「誤解回避>有生性>定性」の順番で-keの出現において重要な要因であるという結論が得られた。これは「定性>有生性」であるとしていた Bhoṭṭacarjo(1984)の論を覆すものである。さらに Bhoṭṭacarjo(1984)は、目的語を二つとる文では直接目的語に-keを付与することはできないとしていた(1.2.節)が、それも反証をあげることができた。

6. 今後の課題

本発表では協力してくださるインフォーマントが二名のみであった。インフォーマントは二名とも言語にたいへん関心のある方であり、また両名の国と年代を変えることが出来たのは幸いであるが、性差については全く考慮することができなかつたため、今後は女性も含めたより広範な調査を行うことが望ましい。

また「誤解回避」については今回深く調査検証することができなかつた。文脈などで「誤解」される可能性が非常に低い場合でもこのファクターは機能するのかなど、さらなる研究が望まれるところである。

略号一覧

1...一人称/2...二人称/3...三人称/DEF...定辞/HON...敬意/IMPL...命令/INF...不定詞/LOC...場所格/NEG...否定/OBJ...目的格/PL...複数/PN...固有名詞/PRF...完了/PST...過去/Q...疑問/SG...単数

参考文献

- Aissen, Judith (2003) "Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy." *Natural Language & Linguistic Theory*, 435-483. Norwell: Kluwer Academic Publishers.
- Bhoṭṭacarjo, Shubhash(1984) *Bangla Bhashar Shat-Shotero* [Seven-Seventeen of Bengali Language]. Kolkata: Anond Publisher's Private Limited.
- Silverstein, M. (1976) "Hierarchy of features and ergativity." in Dixon, R.M.W(ed.), *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian National University.
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』 東京: くろしお出版
- 奈良毅(1992)「ベンガル語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典: 世界言語編第3巻(下-1) む〜ほ』 967-977, 東京: 三省堂.
- 熊鷹(2009)『鍵がドアをあけた: 日本語の無生物主語他動詞文へのアプローチ』 東京: 笠間書院

参考資料

'Prothom Alo' <http://www.prothom-alo.com/> (最終閲覧 2016年1月6日)